

11 代替医療

免疫強化をうたう食品は効果があるのか

癌患者は「溺れる者は藁をも掴む。」という心理になっている。当然ながら効き目が疑わしいが、免疫力を高めるというキノコ抽出液の類いの健康食品も試した。

癌の診断が確定した 2002 年の晩春からアガリクス茸の抽出液を飲みはじめた。この液は肝臓に負担がかかるので、肝臓に転移があったり手術をした後は飲まないほうがよいという情報も internet 上には書かれていたが、1 本 1,600 円もする高濃縮液を手術後も毎日続けて 3ヶ月ほど試した。ある程度免疫力が上がったのか、足の水虫が夏になったにもかかわらず例年のように悪化することがなかった。しかしそれ以上の効果はないような気がしたので、秋口から同じようなものであるが多くの人々が免疫力の向上に有効だった事例が多いと言っている、アミノアップ化学の AHCC を毎食時に服用することにした。

健康食品としては、免疫力増強などの回り道ではなく直接腫瘍に作用するサメ軟骨エキス (Thalidomaid と同じように毛細血管の新生を阻害すると言われている) やフコイダン (海藻から取れる植物繊維の要素で、癌細胞の自殺を促すと言われている) などが有名である。ただ、アガリクスなどを入手した東京上野の漢方薬局では扱っておらず、あまり勧める気がないようであったので、まだ多くの事例が得られていないようだ と判断して、摂取しなかった。

呼吸法で身体の平衡を保てないか

このように過ごしているうちに、肺への播種と肝臓への再転移が発見された。肝臓への再転移とそのいきさつについては 7~9 章に述べたが、肺へは外気から呼吸が直接行われているので、何らかの呼吸法を行うことによって、転移巣の拡大を押さえることが出来るのではないかと考えた。週刊誌や internet などで情報を探すうちに、川越市の O 病院の O 名誉院長があらゆる可能性を追求する患者を受け入れているということが分かった。病院では漢方薬の投与と、太極拳を基本とした呼吸法と運動療法を O 名誉院長が指導しているそうである。ただし、この病院で O 名誉院長の初診を受けるには、1~2ヶ月先の予約を取らねばならないことが問題だった。なぜなら、肝臓を radio 波焼灼法で治療しようと考えていたので、予約が入院とぶつかる と予約が先に延びてしまうからである。

とりあえず、それまでに何らかの呼吸法を身につけようと、internet で探した M 氏が主催する郭林新気功協会がやっている気功の実践会に参加することにした。この会は三心会という任意団体が公共施設を会場として借りて実施している。これについての詳しいことは後の章で述べる。

川越の O 病院へは日本中から患者が集まって来る

1 月になってすぐに T 病院から入院決定の通知があったので、川越の O 病院へ予約電話を入れたところ、予約の受付には婦長が出て、普通の患者は受けつけないような口ぶりだった。すでに郭林新気功を学んでいることを告げると、態度が急変して 2 月の末に初診の予約が取れた。

T 病院での治療が終わって、T 病院から G 病院での参考用にと自費で焼いてもらった CT 画像を持参して、まだ寒風が吹きすさぶ武蔵野の無人駅に降り立った。O 病院は単線となった JR 川越線の駅から歩いて 15 分程度のところにあった。病院には 12 時半ごろ到着した。

O 名誉院長の予約は 13 時であったが、前の人を押せ押せで延々と待たされて、15 時近くになってようやく診察の順番が回って来た。どこの病院でもそうだが、病人を待たせるための待

ち合いの椅子などは、どうして病気が悪化しそうなくらい劣悪な設備なのであろうか。O 名誉院長の著書も読んだし、その効用で長生きしている人達の手記も読んだが、第一印象は「この病院も普通の病院の思考の限界を出ることができないのかなあ。」ということだった。健康人の私でさえ待合いで非常に疲れてしまった。

待合いの問題は別にすれば、O 名誉院長は T 病院で食道外科手術の名手と言われ、X knife の K 病院でも外科部長を勤めただけの人物であった。病気の発見以来の経緯を説明し、AHCC で免疫力の強化を図りながら気功をやっていて、中国にも習いに行く予定であることを告げると、その療法を続けることに大いに賛成してくれて、T 病院から持参した CT 画像とその約 1 ヶ月後の今日撮ったばかりの画像とを比較して、まだあまり進行はしていないと伝えられた。

癌への効果は結局分からなかったが、花粉症には効いた漢方製剤

結局、肝臓の回復と再発防止のために煎じ薬を処方してもらった。漢方薬は自費治療なので、CT を取った初診の受診とは別に受診して 2 週間分で 1 万円強の薬代を払った。

さらに花粉症がひどいことを告げると、こちらは保険が使える飲み薬の漢方製剤を処方してもらえた。この花粉症の薬は大変よく効いた。花粉症の発病以来 15 年ほど悩んだのがうそのように、症状が治まってしまった。いままで多くの医者から漢方製剤や煎じ薬を処方されたのに、さっぱり効かなかったのが、ぴたりと治ってしまったのだから名医と言わざるを得ない。このような医者にとっても癌は一筋縄では行かないのであろう。

次回の予約は一月後ということで 3 月の終わりになった。3 月の終わりの検査で CEA の値が大きくなっていった。煎じ薬は一月分もらって、次回の予約は 3 ヶ月後の 7 月始めとなった。

癌が密かに大きくなっている

CEA の数値は T 病院を退院した時の値より、T 病院で 2 月中旬に S 医師の診察を受けた時の値、2 月末の O 病院での値と順次無気味に大きくなって 20 を越えてしまった。O 病院へ電話を入れてその旨の不安と検査の対処法を訊いたところ、婦長が電話に出て「始めに切った大腸が暴れているのだろう。」という素人のような返事もらった。

不安になり最初に内視鏡での診断を下した東大前の H クリニックの S 医師に電子 mail で質問したところ、電話がかかってきて、

- (1) 癌は血流やリンパの流れに乗って転移するので、大腸を切ってしまうと、身体の上のほうに転移していくことが多い
- (2) CEA の値が上がっているということは癌が増大しているのだから、やはり CPT11 をやって押さえたほうがよい

という親切な診断をしてくれた。癌難民にとってこのように相談できる医師がいることが必要である。

漢方薬と AHCC および気功では癌の増大を押さえられないようであった。しかし、CPT11 をやって週の半分以上を寝て過ごすということは、有効である可能性が非常に低いために、やはり T 病院の S 医師やこの診療所の S 医師などが勧める西洋医学(現在日本での主流の治療法)を全面的に取り入れるには躊躇した。

結局、川越の O 病院は時間とお金と体力の無駄になった

煎じ薬はその後 7 月の診察までの分を代引便で購入したが、6 月になってから病状が悪化したので、服用できなくなりいまでも 1 ヶ月分ほど残っている。当然ながら、7 月に予約した診察には行けなかった。代替医療については、心から信じている人もいれば、科学的根拠がないとして頭から否定する医師や人もいる。この O 医師のように部位や症状に直接対処するだけの

癌治療に疑問を持った医師はごく少数である。したがって、〇名誉院長などの治療を受けるにはあまりにも大変な労力を必要とする上に、かなりの金銭的負担を覚悟しなければならない。それでも、命あっての物種であるからやり遂げるしかないのであるが、妻の場合は部位や病状と治療法とが巧く match しなかったためか、徒労に終わってしまった。

漢方は全人格を相手にした療法だ

中国医学に詳しい先生方の話によると、漢方による癌治療は、患者の全身像を把握しないとできないそうである。中国に於ては、あの壮絶な文化破壊を起こした文化大革命の権力闘争により、伝統的な中医学は壊滅的な被害に遭ってしまった。

本来漢方医は患者の生い立ちや生活の仕方、食事・身体の動きなどあらゆる情報を背景に、伝統的な手法で患者を観察し、体内で不足するものは補い、余るものは押さえて、患者本来の平衡状態へ薬や針、運動療法で導くものである。このようなことができる土着の漢方医が「打破四旧」の号令のもと、みんな紅衛兵に抹殺されてしまったのである。人の流動も激しくなり、子供時代からその状況を知っているという漢方医と患者の関係は成り立たなくなり、伝統的な中医学はその基盤がなくなってしまいつつある。

ところで、手術をした身体は従来の状態から大きく変わってしまうので、漢方での治療対象とはなりにくい。さらに、抗癌剤やその他の薬剤を投与されていると、癌を消滅させる身体の機構を活性化させることに無理が出る。ただし、抗癌剤などの副作用を抑えたり、弱った臓器の機能を回復させる効果や精神を安定化して免疫力を高める効果は期待できる。

代替医療については、妻の場合は結果的にはあまり効果がなかったが、癌発見以前から一種の健康法として行っていたら、十分有効だったように感じる。癌の早期発見に勤めるとともに、自分に合った健康法を見つけることは、直接の効果を期待するだけでなく精神的な安定に役立ち、ひいては免疫力を高めて癌の発生や増大に対処できると思う。

この件については多くの情報があり、どれが正しいとは言えないが、やはりいろいろなところで検証を経て、科学的な証拠が得られているものから試していくのがよいと思われる。命は一つであるから、宗教にすぎるようにどれか一つにすぎたって失敗するのはよくない。しかし、科学的な根拠が薄い代替医療を次々と変えていくのは、もっと悪いと思われる。

この項終了

©2003 Dr.YIKAI